

# 小栗上野介情報82

ホームページHttp : //tozenji.cside.com/ Eメール : tozenji@clock.ocn.ne.jp



2022(令和4)年8月  
発行:東善寺 住職 村上泰賢  
群馬県高崎市倉渕町権田169  
〒370-3401  
Tel・fax:027-378-2230  
〒振替00120-1-406206東善寺

## 対馬事件 - 1

幕末、小栗忠順は米・英・露・仏・蘭、どの国に造船所の建設指導を依頼するか考え…  
「ロシアは個人的な人柄はいいが、何か欲しいといきなり爪を出してくるとして敬遠した」と以前に書いたことがある。この対馬事件の顛末がその典型的な事例といえる。

### 幕末、ロシアの軍艦ポサドニク号が九州の対馬に不法に侵航し滞泊をつづけた対馬事件 - 1 (「オレが交渉で解決した」と騙った勝海舟… 次号2に続く)

注：回、圓、國は→和暦、西暦、ロシア暦

文久元年(1861)回二月三日(圓3月1日、國3月13日)、対馬の浅茅(あそ)湾にロシア軍艦ポサドニク号(艦長ビルフ)が船の修理を口実に入航、芋崎浦に居座った事件。艦長ビルフは船の修理を口実に材木や人員資材の提供を要求。しだいに「イギリスの侵入を防いであげる」と土地の租借へ要求をエスカレートさせた。反発した島民や農兵とのトラブルから殺傷事件も生じた。対馬藩の報告で、遣米使節から帰国後に外国奉行に任ぜられていた小栗豊後守忠順は、幕府から目付溝口八十五郎とともに「見回り=視察」を命じられ咸臨丸で対馬へ向かう。



### そもそもの発端は 英艦の対馬不法侵航

◆イギリス艦の不法侵航がはじまり...1858安政五年の日英条約・日露条約とも「外国船は緊急の気象避難以外には定められた港以外に寄港してはならない」と定められている。ところが  
・1859安政六年四月にイギリス軍艦アクチオン号、十一月アクチオン号とドーフ号が対馬で不法に測量・上陸した。

(小栗忠順はこの年九月に遣米使節目付を命じられた。その前後の四月と十一月)

#### ◆この英艦の情報にロシアは焦った

・箱館のロシア領事ゴシケヴィチは、「英国は対馬を抑えロシアを封じ込めようとしている模様」とロシア外務省に報告。  
・北京駐在の露国特命公使イグナチェフ(元陸軍将校)も、英国が中国の次に対馬を狙っている、と露国東洋艦隊イワン・リハチョフ提督に伝えた。リハチョフは海軍大臣コンスタンチン・ニコライエヴィチ大公(皇帝の弟)に報告した。

### ◆ロシア海軍が「私的契約で土地を租借」する方針 \*露国外務省は無関係の立場を取った

リハチョフ報告を皇帝の前で披露した海軍大臣コンスタンチンは、対馬に露艦を居座らせ、既成事実の積み上げで対馬の大名から基地を租借することを提案した。その提案に、皇帝アレクサンドルII世は日本との外交関係を損なうことを懸念。

しかし海軍大臣コンスタンチンは「日本では幕府とは関係なく大名の了解を得られれば外交交渉の形式を取らずに租借が可能」として皇帝の了解を取り付けると、対馬への進航と既成事実の積み上げで基地租借を図ることを提督リハチョフに指示した。

海軍大臣コンスタンチンにしてみれば各藩ごと藩主に自治権を与えている幕藩体制の弱点をついた案、のはずだった。

\*右上へ

◀ 芋崎浦に建てられている「文久元年 魯寇之跡」碑



### 露国 外務省は傍観者

外務大臣ゴルチャコフはこれまでの日露の外交努力をご破算にしかねないずさんな計画とみたが皇帝の弟の海軍大臣に正面から反対しにくい。「海軍だけで実行してくれ」と一任した。

(外務大臣ゴルチャコフは)・・・この席でイグナチェフをこの問題

から解放するように私に願ひ、この問題を外交問題としてではなく純粋に海軍の問題にする、それ故に問題をあなたに一任すると話を結びました。

(海軍大臣コンスタンチンからリハチョフ提督宛書簡・岡山大学保田孝一編著『文久元年の対露外交とシーボルト』)

◆海軍大臣コンスタンチン→提督リハチョフ→艦長ビルフと海軍独断の指示で起きた事件。

◆当然、外務大臣ゴルチャコフは、箱館領事ゴシケヴィチや在北京公使イグナチェフに、対馬で露国海軍の問題が起きて



▲ポサドニク艦長ビルフ

も一切関わりを持たないよう指示を出し、外務省は傍観者になっていたと考えられる。

### 命令され進航・滞泊している艦長ビルフ

ビルフとの第2回め会谈(回五月十四日圓6月9日)で小栗から不法滞泊・測量を非難されたビルフは「船の修理をしていたらちょうどそこへリハチョフ提督から命令があつて、ついでに海図を作成するように言ってきた…詳しいことは提督か領事ゴシケビッチから聞いてくれ」と小栗に語っている。(日野清三郎『幕末における対馬と英露』)。小栗は、艦長ビルフは命令で動いている海軍組織の末端で、露艦を退去させるには命令ラインの上部から退去命令を出さなければならないと判断した。末端の艦長を突いてもこの問題は解決しない。もっと上部との外交交渉が必要と判断して江戸へ戻った。「小栗上野介は対馬に派遣されて2週間滞在し、わずか3回交渉しただけで交渉に失敗し、江戸に戻った。」と非難するのは当たらない。

\*裏ページへつづく

# 通説「英艦が行ったから露艦が退去」は誤り …命令なしに退去したら**任務放棄・命令違反**で軍法会議

▼注：罇、罇、罇は→和暦、西暦、ロシア暦

## 英艦が勧告後**23日も後**になって露艦は退去している

罇六月十日 罇七月十七日 罇7/5 と 罇七月三日 罇八月八日 罇7/27	【箱館で】箱館奉行村垣範正が領事ゴシケヴィチに退去を要求第1回。ゴシケヴィチ「知らなかったが、退去に同意し提督リハチョフと対馬の艦長ビリレフに伝える」と約束/第2回も
罇七月九日 と 十日 罇八月十四日・十五日 罇 8/2・3	【江戸で】英公使オールコック・東インド極東艦隊司令官ホープ提督、ロビンソン総督、オリファント書記官等が、老中安藤信行・若年寄酒井忠毗ただますら幕閣に「英艦を対馬に派遣を提案」了解を得る。*この場に勝海舟はいない
罇七月十二日 罇八月十七日 罇8/5	【箱館】リハチョフから箱館領事ゴシケヴィチに「 <b>退去に同意</b> し（連絡の）露艦オブリヤークを対馬に差し向けた」と返信が届く。*決定一発信は最低7日以上前であろう
罇七月二十三日 罇八月二十八日 罇8/16	【対馬】英艦のホープ提督が対馬でビリレフに5ヶ国条約を盾に退去を勧告。 <b>*しかし、ビリレフは退去しない</b> *ホープはさらにオリガ港（ナホトカの北）へ行き八月一日（罇 9月5日）提督リハチョフ宛に退去勧告の手紙を残す
罇七月二十六日 罇八月三十一日 罇8/19	【対馬】露艦オブリチニックが対馬着。 <b>リハチョフ提督とゴシケヴィチ領事の対馬退去命令を艦長ビリレフに伝える</b> ビリレフは対馬藩士に「罇八月中旬に出航し箱館～江戸へ行く」と伝える
罇八月五日 罇九月九日 罇8/30  罇八月十日 罇九月十四日 罇9/2	【箱館】対馬から箱館に入った英艦から「七月二十四日時点で露艦は退去せず」と聞き、奉行村垣は領事ゴシケビッチに抗議、第3回。 【箱館】奉行村垣は領事ゴシケヴィチに露艦退去を強く要求、第4回。
罇八月十五日 罇 9月19日 罇9/7  罇八月二十五日 罇九月二十九日 罇9/17	【対馬】艦長ビリレフは露艦ポサドニックで対馬出航一箱館へ *実質上の <b>対馬退去</b> 【対馬】露艦オブリチニックも対馬を退去 * <b>対馬滞泊の露艦はすべて退去した</b>

### 英艦とのにらみ合いで露艦が**スゴスゴ退去した**劇画のようなイメージは誤り

もし提督リハチョフからの命令なしに「英艦が来たから」と退去したら、艦長ビリレフは間違いなく（**任務放棄・命令違反**）で軍法会議にかけられる。軍人が一番やってはいけないこと。

・箱館奉行村垣範正から再三の抗議を受けた箱館領事ゴシケヴィチが、幕府の抗議と江戸における欧米外交団の不評と反発を伝えたので、**提督リハチョフが撤退を決意したのは六月末**。つまり、英公使オールコックらと老中酒井忠毗ただますの**英艦派遣の相談以前に露艦の退去を決定**している。

・罇七月二十三日、英艦リンドープのホープ中将が対馬に着き、ビリレフに退去を勧告……でもビリレフは**退去せず**。

・三日後の罇二十六日に**提督リハチョフからの退去指令**が対馬の艦長ビリレフに届いた……それでも**すぐに退去せず**

・実際に露艦ポサドニックが**対馬を退去したのはホープ勧告の23日も後**（罇八月十五日 罇9月7日）である。

これでは「**英艦が行ったので露艦が退去した**」とはいえない。

\*提督リハチョフはのちに「**外交抜きで基地租借交渉する**」という指示条件に合わなくなったので、**撤退を決意した**。と報告（12月、海軍大臣コンスタンチンあての報告書）している。

### 【小栗上野介に濡れ衣】

『小栗上野介が転封を対馬藩に強要した』とする説（=濡れ衣）が出ています。

「小栗は対馬を天領としてロシアに浅茅湾を軍港として貸付ける。…追い出される対馬藩から強烈な反発が出るし、対岸の長州も…うまみのある対馬経由の貿易が一切不可能になるということで必死の抵抗をするはずである…」

として、それが理由で

「…小栗は**官軍によって処刑されるが、その原因を対馬問題の時から作っている**…」（上垣外憲一『勝海舟と幕末外交』中公新書・2014平成26年刊・抜粋）と、とんでもないことを理由に6年後の慶応四年に起きた西軍による小栗上野介父子主従殺

害を正当化しています。

時系列で見ると

・三月二十八日 対馬藩は江戸藩邸の協議で藩政の基本方針として移封要望を決議した（日野清三郎『幕末における対馬と英露』）

・四月六日 小栗上野介は対馬派遣を命ぜられ→五月七日対馬着。…と小栗上野介が対馬事件に関わる以前に藩では移封を要望することを決議しているのに、なぜ「**小栗上野介が強制した**」ことになるのか、根拠史料も示さず「**移封を強制した**」「**ロシアに浅茅湾を貸し付ける**」とするのは理解に苦しむ。

この濡れ衣を元に、西軍による（小栗父子主従8名を殺害一家財没収一入札で売り払い一軍資金とした）ことを正当化する記述につなげています。

### ◆小栗まつり 5月22日 3年ぶり再開

情報あれこれ



『鎖国の正体』 鈴木荘一著・柏書房・2,700円

日本が植民地にならなかったのは、秀吉、家康、秀忠、家光がポルトガル・スペインによる「日本国民キリシタン化～植民地化」のカトリック戦略を見抜いて排除、交易と布教を分けて捉えるプロテスタントのオランダにだけ交易を認める「鎖国」をしたため。それが250年戦争がない「徳川の平和」江戸時代をつくったと説く。

『**築地ホテル館**物語』 永宮 和著・原書房・2,000円

幕末最後の慶応四年に日本初のホテルとして完成した築地ホテルの物語。小栗上野介、清水喜助（清水建設二代目）、三野村利左衛門（三井組大番頭）らの活躍を描く。ただし、小栗の横須賀造船所建設を「海軍力増強～反幕府勢力駆逐のため」としたのは、薩長史観からか。「幕府は終わっても国の運命は続く」として、後世のための「土蔵付き売り据え」と語った小栗の意図を見落としている。

『**万波を翔ける**』木内 昇著・日本経済新聞出版社・2,000円

実在の人物・江戸っ子幕臣の田辺太一が主人公の小説。新設の外国局に勤め上司の外国奉行や老中と外国人との交渉にじれったい思いをぶつけ、もがく悪戦苦闘の姿を通して幕末を描く。水野忠徳、小栗忠順、村垣範正、トミー、福地源一郎らも登場する。

式典・講演 ・挨拶・祝辞 ・講演 …倉渕小学校

講演 『開成をつくった男・佐野 鼎』（講談社）の取材から見えてきた小栗忠順との接点

作家 柳原 三佳 氏

遣米使節に随行した金沢藩の砲術指南役佐野鼎は憧れの小栗忠順と船中で直接会話できた喜びを手紙で友人に送り、のちに国を守るのは大砲ではなく教育と考えを変え、有数な進学校開成学園の前身「共立きょうりゅう学校」を創立。その後数年でコレラで病死したため佐野鼎の名は殆ど知られていなかったことを、豊富な画像で語った。

墓前祭・昼市・演奏会

…東善寺

墓前祭 読経・参列者が小栗主従と家臣・殉難の村人に献香

演奏会 群馬マンドリン楽団がトミー

昼市 地産の野菜、陶器、まんじゅう、関連書籍などいろいろ

